



『新型コロナ災害緊急アクション活動日誌』2020・4・2021・3
 社会評論社、一九八〇円

瀬戸大作 原作
 平山昇、土田修 企画・編集

ある青年のSOS

この書評の原稿を書いている七月四日、著者瀬戸大作のフェイスブックには二〇代前半の青年のSOSが記されている。待ち合わせ場所は(たまたま)自治労本部の最寄り、市ヶ谷。青年の所持金は一五〇円。派遣雇い止め、寮を追い出される。もう一人、ネコと一緒に一カ月



グラビア	地域を支える人 緑川慎也さん・栃木県宇都宮市	1
発掘!地域の希望のタネ	〈大田の大あなご〉島根県大田市	5
給食のじかん	〈岩美の幸白いかサラダ〉・鳥取県岩美町	中山明子 6
書評	瀬戸大作 他『新型コロナ災害緊急アクション活動日誌』菅原敏夫	8
焦点	核兵器の時代を終わらせる—核兵器禁止条約の意義と展望	川崎 哲 10

特集 パンデミックと貧困のいま

拡大するアンダークラス—新しい階級社会の貧困層	橋本健二	16
追い込まれる女性たち—コロナ禍が可視化した女性の貧困と格差	飯島裕子	25
住居確保給付金事業から見たコロナ禍の困窮—西東京市「福祉丸ごと相談窓口」の現場から	後藤紀行	32
食料支援で困窮世帯とつながる—フードバンク山梨の取り組み	米山けい子	40
コロナ禍の女性・若者の“雇用危機”と権利闘争—労働相談の現場から	青木耕太郎	47
コロナで困窮する学生、若者たち—学費・奨学金問題の解決に向けて	小川俊明	54

各県自治研活動レポート	尼崎市の聴覚障害職員を中心とした取り組み 兵庫県本部	玉城勝太郎 62
連載	東日本大震災の被災地は今③福島県いわき市 求められる災害対応力の強化	新妻 浩 64
	自治研センターの機関誌案内	71
	次号予告・編集部から	72

間も野宿生活を続けていた女性。福祉事務所に相談に行ったが、「ネコを処分しないと生活保護の申請はできない」と言われ続けた。当座の生活費を支援し、ネコの食料と砂も補充。

本書は文字通り「日誌」だ。二〇二〇年四月からの一年間、反貧困ネットワーク事務局長の瀬戸と支援団体の活動を追ったものである。

緊急アクション
 本誌の読者は四月号特集「コロナ禍の雇用を考える」の中で、瀬戸が「死のうと思つたが死ねなかった」とのSOSをとり上げて語っていたのを記憶されているだろう。それから四ヵ月、私たちは再び「貧困のいま」に特集で向き合うことになった。

四月号で瀬戸に原稿依頼をするおり、編集部の中で少し議論があった。SNSなどでみている限り、駆けつけ支援が終了するのは平均午後九時半、土曜も日曜

も、遠方からもSOSは途切れない。原稿なんて書いている暇があるだろうか。ほどなく瀬戸の原稿が届けられた。アップテンポで、極め付きの臨場感。背景にあるのだと思つた。かなりの部分は「現場」で「路上」で書かれているに違いない。支援の継続を

本書を企画し、編集した平山、土田も同じことに気づいていたのだと思う。瀬戸のフェイスブックを編集し、日誌に仕立て、少し長めの書名をつけて出版にこぎつけた。

もちろん個人の活躍だけでなく、支え続ける運動の成果なのだが、描かれているのは、直接支援の現場の圧倒的な存在感である。

緊急アクションは、本書の出版の後も、たぶんコロナ禍の後も終わりようがない。支援の継続を訴え続ける。

評者 菅原敏夫 本誌編集委員